
合否に関係なく

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

合否に関係なく

【Nコード】

N2813T

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

一足先に大学合格を決めた主人公。でも、一緒に頑張っていた女の子は……。

センター試験が終わり、私立大学の入試や国公立大学の前期試験が始まりつつあるそんな時期。

推薦でいち早く合格を決めていた俺は、受験組とは違って余裕のある生活を送っていた。といっても、推薦組は推薦組で大学側から課題を提出されるため、机から完全に離れることはできなかったわけだが。

そして今日も俺は、課題を片付けるべく登校の義務はないものの、集中しやすい図書室へと足を運んでいた。

図書室に入ると、ガラガラではないものの、何人かが座っており、各大学の赤本だったり、参考書を広げながら、真剣な様子でノートにペンを走らせている。

そんな人たちに心の中でお疲れ様、と労ってから彼らの視覚に入らないよう配慮して、俺はなるべく離れた席に座った。全てが終わり、ゆるんだやつ姿なんて見たら士気が低下する。そうならないための配慮だ。

俺は課題をカバンから取り出しながら、両耳にイヤホンをセット。よし、俺も集中しよう。

音楽プレーヤーのスイッチを入れて、お気に入りの曲を聴きながら俺は課題に集中していった。

一時間くらいたった頃だろうか。

俺の隣に誰かが座った気配を感じたので、何気なく隣を見てみた。隣には俺がすでに合格を決めた大学の赤本を広げている女の子が座っていた。しかも、クラスメートで、俺と同じく推薦試験と一緒に受けた女の子だ。

俺が受かったが、彼女は落ちてしまったため、非常に気まずかった。推薦試験前までは一緒に頑張ろうとお互いに励ましあってきた

のだが、合否が明らかになった時から声をかけ辛くなってそのままだった。

そんな彼女がなぜ、俺の隣に？

席自体は他にもあるのに、どうして……？

俺が彼女をじっと見つめていたからだろうか、彼は俺のほうへ視線を向けてきた。

俺はどんな顔をしたらいいか分からなかったから努めて無表情を作った。

しかし、彼女は驚いたことに俺に微笑みかけてきたのだ。
一体なぜ？

彼女の口が動き、言葉が紡がれる。

俺の両耳にはイヤホンがセットされ、彼女の声が全く聞こえなかった。すると、彼女は何か気付いたような表情をした後、クスツと笑って俺の両耳から優しい手つきでイヤホンを取り去った。

俺は彼女のいきなりの行動に驚いた。そして、俺が言葉を発する前に彼女が頬を赤らめながら口を開いた。

「久しぶりだね、こんな風にお話するの」

長めの髪で結われたポニーテールを揺らしながら彼女は笑った。

「そう、だね」

俺の声は自分でも分かっってしまうくらい固いものだった。彼女はそんな俺に苦笑しながら言った。

「前みたいに笑顔でいてくれればうれしいんだけどな、私は」

君はそういうけど、そんなこと、俺には出来ないよ。だって、俺だけ受かって君は落ちたんだぜ？

俺だけ幸せそうな顔、君の前では出来ないよ。

「って言っても、君は真面目だからなあ。私が試験に落ちたことを気に病んでいるんでしょう？ 違う？」

「……」

「ま、そこは答えられるわけないよね。でもさ、君が試験のためにものすっごく頑張ってきたのを私は知ってるから。だから、そんな

に自分を追い込まなくてもいいんじゃないかな？ それに、私が推薦落ちたのも結構妥当だなんて、自分でも思うし」

彼女は少しだけ笑ってから、俺を見つめた。吸い込まれそうなほど真剣な表情だった。

「私、君が受けるから推薦受けたんだよね。ぶっちゃけちゃうとさ」「え……？」

何だろう、今日は驚かされてばかりだ。そんなことを唐突に考えてしまう、俺。

「君と、一緒にいたいなって。今まで、クラスずっと一緒だったでしょ？ ストーカーみたいだったけど、君と離れることってさ、私、考えられなくて」

彼女の言葉に赤くなり、とっさにうつむく俺。

彼女は端的に言うなら美少女だ。校則通りの真面目な格好であるもの、全体的なパーツは綺麗に整っている。そして、外見とは裏腹なフランクな性格も魅力の一つだ。

そんな美しい彼女が、俺みたいなやつを？

「私はね、君が好きだったから。君と離れるなんて考えられなかったから。だから、一緒に推薦試験を受けた。そんな不純な動機で、高い理想を持って試験に受けにくる連中に推薦試験では敵うはずがないんだよ。だから、君は受かって私は落ちた」

彼女は俺を見ながら淡々と話す。俺は彼女の強い視線から目が離せない。そこで彼女はにやりと笑った。

「推薦試験では勝てないかもしれない。でもね、前期入試や後期入試なんかだと理想だの何だのは一切関係ない。点数が勝負なんだ。だから、志望理由がどんなに不純だろうが点数を取った人が勝つようになっている。だからね、今度は私は勝つよ。君と一緒にいたいから」

そう言って彼女は笑った。まるで自分の全てを語りきったのかのように。表情には満足感があふれていた。

「分からないよ。どうして俺のことをそこまで？」

そう。俺には分からないことがあった。容姿は人並だし、推薦で受かったとはいえ学力は並み、運動も人並だったから部活では地区大会が精々だったいわゆる普通である俺に、彼女が惹かれる理由が分からなかった。

「君は何気なく人を気遣える優しい人だから。それにね、君の容姿なんだけどもみんな人並というのだけれど、私から見たらどんなアイドルなんかよりもカッコよく映るんだ。知らないうちに君に惚れてしまった。だから、どうしてといわれても困ってしまうよ」

でもね、彼女はそう言葉を続けて言った。

「ただ一つ。確実に言えるのは、君のことがものすごく愛おしい、これだけは自信を持って言えるよ？」

彼女は頬を赤らめながら恥ずかしそうに言った。俺も聞いててスゲー恥ずかしくなって来た。

「あー！ もう！ 恥ずかしいなあ！ 本当はこんなこと言うつもりじゃなかったんだけどなあ……。ただ、君の近くで勉強すればやる気が出るかなって、そう思っただけなのに」

彼女は真っ赤になった顔を両手で隠しながら俺を睨むように見えてきた。

「で、どうなの？」

「え？」

「君の答え。ここまで言ってしまったら君の答えが聞きたくなるよ！ 君に数カ月も話せずに悶々としていたことを分かってくれるなら、答えをちょうだいよ？」

俺の答え。

正直、彼女の気持ちは嬉しいが、俺はそんな目で彼女を見てこなかったから答えを出しづらい。だから、彼女には悪いが答えは先延ばしに……。

「答えを先延ばしに、なんて思わないことだね。そんなことしたら、私の想いは暴発して君に何をするか分からないよ？」

彼女がにやりと笑って顔を近づけてくるのを見ながら、俺は焦り

ながらもどこか諦めたふうに彼女を受け入れるのだった。

(後書き)

ご感想、ご意見、ご指摘を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813t/>

可否に関係なく

2011年5月15日02時55分発行